



馬耳東風

高齢化社会と言われるようになって久しいが、わが国の高齢化率(65歳以上人口の比率)は、2019年の調査で28.00%と世界一だそう。2位イタリア23.01%、3位ポルトガル22.36%、以下14位のリトアニアが20.16%と20~23%の間に13カ国がひしめいており、わが国の高齢化率は群を抜いている。今後も総人口が減少する中で高齢化率は上昇を続け、2036年には33.3%と3人に1人となると予測されている。わが家の近所に大きな敷地に工事が始まったなと思っていると、そのほとんどが高齢者施設である。自分もいずれはこういう施設に入ることになるのかなと考えると憂鬱になってしまう。何しろ人と付き合うのが苦手、無類の犬好きで犬のいない生活は考えられないからである。高齢者、それも一人暮らしの場合、ペットだけが生きがいというひとが増えていくことは想像に難くない。実際、一人暮らしの高齢者で自立が困難と考えられる人を施設に入居してもらおうと思っても、一緒に暮らしている犬や猫と離れるのが嫌だと言って拒否する人も多いそう。そういう現実を見たある人が、伴侶動物と一緒に入居できる施設(特別養護老人ホーム)を作った(「看取り犬・文福」, 宝島社)。

ここでは、100床のうち40床が犬や猫と一緒に暮らせる。上記の本のタイトルとなっている「看取り犬」というのは文福という名前で、入居者の死を2~3日前に予感してその人の部屋のドアの前でうなだれて座り込み、いよいよ死が近づくとベッドの上に上がって慈しむように顔や手をなめるといふ。文福は保護犬で、安楽死寸前だったそう。この施設にいる犬の中には他にも保護犬出身? がいるというが、このような行動をするのは文福だけだということから、彼に備わった特殊な能力であ

ることは間違いない。高齢者や障害者に動物が果たす役割については、アニマルセラピーを持ち出すまでもない。この施設でも、認知症で息子が認識できなくなっていた女性が、施設の犬を昔自分が飼っていた犬の名前で呼び、可愛がっているうちに次第に認知機能の改善が見られ始め、ついにある時面会に来た息子に彼の名前を言って話しかけてくるようになったそうである。しかし、人の死を予感し、しかもその瀬戸際でその人を慈しむような動作をする犬というのはこれまで聞いたことがない。徒歩で山道を高野山に向かう人の道案内をする犬の話の聞いたことがあるが、犬には人知を超えた人との絆があるのかもしれない。それだけに一緒に暮らしていた犬に死なれるとショックは大きい。一般にペットロスと言われているが、2年前に愛犬を亡くしたあと1年ほど散歩する気力も失った経験者としては何か「軽い言葉」のように感じられる。私の近所には愛犬を亡くしたあと自死した家庭の主婦もいるやに聞く。

過日、新聞でペットロスに陥った人の「心の空洞」に寄り添う日本ペットロス協会という組織があることを知った。この協会の設立者は、獣医大学の学生だった頃、大学の附属病院で死亡した犬の飼い主がショックで動けなくなり火葬を依頼されたという。そのお骨を飼い主の夫婦に届けた際、あまりの悲しみように深く心を動かされ、獣医大学を出た後、仏教学部に入りなおして心理学を学んだそう。このような組織があることは大変意義深い。高齢化社会がさらに進展する今後は、伴侶動物と人間の距離がますます近くなるだろう。獣医師は、治療のエキスパートであるだけでなく、甲斐なく患者が死亡した際には、飼い主の心に寄り添えるような専門知識を持つことが要求されるようになるのではないだろうか。(久)